

『帰る場所はどこにある』

ころもち

――足りてるか？

何も降らない空から、何度も訊かれたその言葉だけが落ちてくる。私はその問いに、首を縦に振ることはできない。だけど、横に振ることもない。

白を溶かした天を仰ぐ。

雪と土の混ざり合った、冷たくも安らぎのある重たいコートの手が、鼻の奥に蘇る――。

*

十一月の下旬。

取材旅行で降り立った駅で、彼は待っていた。

この土地の案内役として、同年代で話しやすいだろうと紹介された農協勤務のその男性は、深緑のウールコートと共に重たい空気を纏っていた。

「どうも」

名刺を渡すと、それだけ言ってコートの内ポケットにしまふ。声は低く、抑揚も少ない。お世辞にも愛想がいいとは言えない。ただ、冷たいのとも少し違う。

「今日と、明日」

その口からこぼれるのは、端的な事務連絡。一週間の滞在のうち、二日間だけ案内をしてもらう予定だった。

「よろしく願います」

彼はその言葉に目を細めると、おもむろに歩き出した。

「あ、ちょっと」

急いで後を追いかける。

これが、新潟との出会いだった。

「寒いですね」

新潟は私の前を、背中を向けて歩く。

「こんなもんだ」

振り返らない。大きな背中。

長い川沿い、ひととき強い風が吹いて初めて、彼は風上に立っているのだと気が付いた。思えば歩調も合わせている。言葉も主張も、嫌みもなく。

着いたのは、町の食堂だった。観光客向けの看板はない。

「ここは、昼がいい」

それだけ言って、席に着く。

定番の定食を頼み、運ばれてきた白いご飯を一口食べると、私は思わず息を止めた。

「……お米、おいしい」

新潟は私の茶碗を見て言った。

「足りてるか？」

量のことなのか味のことなのか、曖昧な問い。

「はい、全然十分です。すごい、びっくりしました」

「なら、よかった」

誇るでもなく、説明するでもない。けれど、そう言った新潟の顔には、新雪のような柔らかさがあった。

帰り道、会話は少なかった。それでも気まずさはなかった。彼を纏う空気は冷たいのに、乾いてはいない。息を吸うと、その静寂が肺の奥に沈んでいく。

駅に着くと、新潟が足を止めて振り返った。風が過ぎるのを待ったあと、ようやく開いた口から落ちる短い音。

「じゃあ、明日」

「はい。ありがとうございます」

いつまでもそこに立っている新潟にもう一度頭を下げて、私は駅へと入っていった。

――変な人。

派手でも特別でもない。なのに、妙に心に残っている。

明日の再会をもう楽しみにしている自分がいた。

*

二日目の午後三時。新潟は駅前の同じ位置に、同じコートで立っていた。

軽く挨拶を済ませると、新潟が歩き出す。

「今日はどこに行くんですか？」

「酒蔵だ」

町外れにあるという酒蔵までは少し歩くらしい。その間、新潟のコートが擦れる音が、季節を奏でるようで心地良い。

「さっき駅前で、昨日と同じ場所にいたじゃないですか。昨日からずっといたのかと思っちゃいました」

「……帰った」

冗談が通じたんだか通じてないんだか、顔は見えないけれど、背中が弾んでいるように見えた。

「ここは、長く続いている」

短すぎる説明を伴いながら、新潟が木造の扉を開ける。

酒蔵の主人に話を聞いたあと、試飲をいただいた。淡い色、無駄のないキレ、すっと静かに

染み渡る温度。ふと新潟を想起して隣を見上げる。

目が合った男が、珍しく饒舌に語った。

「詳しいんですね」

彼はほんの少し色づいたように見えた。

「長く飲んでるだけだ」

続くことの強さを、新潟自身が示していた。

酒蔵を出ると、日が傾きはじめていた。

新潟は私の隣を歩いた。深緑のコートから、稲藁の匂いが仄かに香る。

「二日間、ありがとうございます」

私が早めのお礼を告げると、新潟はふいに足を止めた。

「……腹は？」

彼の口からこぼれ落ちる、業務以外の連絡。夕飯には少し早い。だけど――。

「空いてます」

「じゃあ、少し」

少し、という言い方がいいな、と思った。大げさじゃない。期待させすぎない。

駅から少し離れた居酒屋に入ると、新潟は慣れた足取りでカウンターに向かった。

「ここ、よく来るんですか」

「たまに」

私は開きかけたメモ帳を閉じた。今日はもう、取材じゃない。そう決めた。

新潟が頼んだのつべと焼き魚、そして熱燗が運ばれてくる。

「どれくらい？」

「じゃあ、少し」

「少しでいい」

何がお気に召したのか、新潟は口元を緩めながらお猪口に酒を注いだ。

食事を口に運びながら取材旅行の話をする、新潟は料理の味とリンクするように、優しく頷いた。

「地方の取材って初めてで、正直自信なくて」

新潟は、遮らない。ただ、聞いてくれる。

「ちゃんと来た成果を出せるのかな、とか思っちゃって」

新潟は箸を置き、私の顔を見つめている。

「……すみません、こんな話されても困りますよね」

「いい」

いつもの短い返事。そのあと、もう一度口が開いた。

「言葉にしないと、溜まる」

その言葉が、さっき飲んだ日本酒のように、胸をすつと通過していく。

「ありがとうございます」

新潟は私の手元を一瞥すると、徳利を軽く上げて訊いた。

「足りてるか？」

空っぽのお猪口。十分足りている気もするけれど。私は盃を差し出して応えた。

「じゃあ、もう少し」

新潟の持つ徳利がゆっくりと頷いた。

居酒屋を出ると、もうすっかり夜だった。思ったより話し込んでいたらしい。

駅まで並んで歩く。街灯のまばらな道の中、新潟の足音が孤独を掻き消している。

「本当にありがとうございました」

駅前、向かい合って改めてお礼を言うと、新潟は少し間を置いてから言った。

「じゃあ」

それが少し、寂しくもある。

「はい。おやすみなさい」

新潟はなおそこに立っている。私が背を向けて歩いても、彼の足音は聞こえなかった。

寝る前、ベッドの上でぼんやりと思い返していた。新潟という存在。多くを語らないのに、ひとりじゃない感じ。

——本当にあのままあそこに立ってたりして。

想像するとおかしい。なのに心が落ち着いて、そのままずっと眠りについた。

*

三日目。ノートPCを開いたまま、両手は止まっていた。画面上の原稿用紙は白紙のままだ。

——急に連絡したら迷惑かな。

そう思いながらも、気が付けば新潟にメッセージを送っていた。

『今から少し時間ありますか？』

我ながら厚かましいとは思うが、もう少し話をしたかった。

『家に来るなら』

予想外の返事に、私は慌てて家を出た。

いつもの駅に降りた時、いつもの場所に新潟がいなくて、「ちゃんと帰ってるんだ」なんて当たり前のことに笑みがこぼれる。

新潟の家は、この地が誕生した時からそこにあったかのように、風景に溶け込んでいた。外は板張り、中は漆喰。玄関先には雪かき用のスコップが立てかけられていて、冬の厳しさに耐え抜いてきた歴史を感じさせる。

「急にきて、すみません」

「来たいなら、いい」

居間には温かいお茶が用意されていて、座ってゆっくり話をした。この町の魅力。新潟の仕事。私の仕事。結局、私のほうがよく喋った。新潟といると、不思議と自分が見えてくる。

それから彼は、いろんな場所に連れていってくれた。地元の神社。収穫を終えた稲田。そして五日目には海へ出かけた。

灰色の空を映した重たい波は、人を寄せ付けない風格がある。

「冬の海って怖くないですか？」

「晴れた日は、ちゃんと青い」

ずれてるような、芯を突くような返し。

「ほんとに？」

「本当」

なんでもないやり取りが妙に温かくて、私は一步新潟に近づいた。

「それ、信じていいやつ？」

「疑う理由あるか」

真面目で、正直で、人をよく見ている。冷たいようで温かい。新潟の瞳は、空と海の青を映していた。

*

六日目は、朝から雪が降っていた。

取材を終えた夜、宿で原稿を直していると、第一稿を送っていた編集部から連絡が入った。

『企画が弱い。魅力が伝わってこない』

窓の外の雪が強くなる。頭が真っ白になり、書きかけていた文章をすべて消した。

スマートフォンが震えた。新潟だ。

『どうだ？』

その三文字に目頭が熱くなる。

『行ってもいい？』

新潟の返事は決まっていた。

『来たいなら』

駅に着くと、新潟はそこにいた。いつものあの場所に。

「今回の取材、さ」

新潟の家に向かいながら、私は弱音を吐き出した。

「意味あったのかな」

言葉にした途端、雪が風に煽られて横殴りになる。

新潟は歩調を少し落としただけで、何も言わない。

「いつもそうなんだよね。書いて、出して、足りないって言われて」

雪が視界に入り込んで、遠くの景色が白く滲む。

「私、ここに来てよかったのかな」

新潟は答えなかった。代わりに、ポケットから缶コーヒーを取り出して、私の手に押しつけ

た。

熱い。思ったよりも、ずっと。

持つてるなら駅で渡せばいいのに。今出すなんて。

「……ずるい」

そう言うと、新潟は前を向いたまま返した。

「タイミング逃したただけだ」

その体温を奪ってやろうと体をくっつけると、潮風が土を乾かしたような、どっしりとした香りが私を包みこんだ。

新潟の家では、とくに会話は紡がずに、ただ二人で並んで座っていた。それだけで心が軽くなっていた。

取材旅行は延長になるだろう。もちろん仕事としては失敗だけど、胸を躍らせている節もある。

雪は激しさを増していった。

「これは、止まるな」

窓の外を見て新潟が言った。

ネットで調べると、案の定電車が運転を見合わせている。

「……どうしよう」

「今日は、無理だな」

まるでここまで積み上げてきたものが跡形もなく埋もれていくみたいで、不純な気持ちを抱いた自分を恨んだ。

背後からボフリと重たい物音。新潟が居間に布団を敷いている。

「夜食は、麺でいいか？」

言葉は何ももらっていない。励ましも、答えもない。それなのに「ここにいていい」と伝えてくれている。新潟が、側にいる。

その存在が、吹雪の中の明かりみたいに、私の心に灯っていた。

*

翌朝目を覚ますと、お米が炊ける匂いが鼻をくすぐった。

「おはよう」

台所にいた新潟に声をかけると、炊飯器の蓋が開く。

「ご飯できてる」

机に並べられた朝食。白米に焼鮭に味噌汁。特別なものは何もない。だけどやっぱり、お米は甘く、口に香りが広がった。

「足りてるか？」

新潟が訊いた。いつもの問い。

「うん。ありがとう」

量も味も、気持ちも。十分過ぎるくらい、足りている。

「なら、よかった」

新潟も自分の箸を取り、お米を口に頬張って頷いた。

雪はすっかり止んでいた。それでも積もった道を歩く気力はない。持ってきたPCを開いて、仕事を再開した。

新潟は離れた場所で本を読んでいる。

静かな時間。

ふと、この時間を記事にしてみようと思った。新潟と過ごす、ゆったりとした時間。多くを語らない会話。静かに受け入れる包容力。この地を象徴するような人となり。

原稿を書く。新潟はただ、そこにいる。

時折、どうでもいいことを話した。

「都会だと、静かすぎるのって逆に怖くて」

新潟が本から顔を上げて返す。

「慣れだな」

「怖くない？」

「静かだからな」

「……意味、通じてる？」

「通じてる」

二人して声を出して笑った。

言葉は少ないのに、だからこそ、わかりあえるものがある。

夜、雪道を新潟に送ってもらい、あの居酒屋で劳いの杯を交わしたあと、いつもの駅で別れた。

宿に戻り、書き直した原稿を編集部に送る。

今度は通るだろうか。

——通じてる。

新潟の言葉をお守りにして、微睡みに身を委ねた翌朝、編集部からのゴーサインが届いた。

長い息を吐く。

終わった。終わって、しまった。

それでも、ここにいる理由はない。

『原稿通った』

新潟にメッセージを送ると、すぐに返事が返ってきた。

『そうか』

それだけ。それでも、スマートフォンの前に座り込む新潟の姿が目に見え、コーヒーの熱さを思い返した。

「じゃあ、帰るね」

私と新潟は、駅前のいつもの場所に対峙していた。

「そうか」

いつでもどおりの淡い台詞。

気持ちの温度差が悔しくて、寂しくて、新潟のコートを掴んでみる。土の匂いに雪が混じって、ひとりで四季を背負い込んだような、冷たくも温かい匂いが代わりに返事をした。

――ずっと、ここにいる。

春になっても。また冬が来ても。

新潟は引き止めない。「また来い」とも言わない。ただ変わらずに、そこに立っている。コートを離す。片手を挙げる。言葉はいらない。

新潟はいつもの場所に、当たり前のように立ち続けている。その姿が告げている。

――帰る場所は、ここにある。

迷ったとき、疲れたとき、言葉がいなくなったとき。白いご飯と、淡い酒と、黙ってそこにある背中を思い出す。

新潟は、いつもそこで待っている。